

## 神経伝導検査における検査手技の技師間差低減への取り組み

◎伊藤 大佑<sup>1)</sup>、小浦 知夏<sup>1)</sup>、高橋 綾華<sup>1)</sup>、谷口 咲希<sup>1)</sup>、清水 美希<sup>1)</sup>、尾崎 典子<sup>1)</sup>、藤田 恭代<sup>1)</sup>  
独立行政法人地域医療機能推進機構 徳山中央病院<sup>1)</sup>

【はじめに】神経伝導検査は末梢神経の伝導状態を電気生理学的に評価する検査である。電気刺激による痛みを患者に与えるため、神経の走行を正しく捉えることにより、できるだけ低い刺激出力で最大上刺激が記録できるよう努める必要がある。

今回、神経伝導検査における検査手技の統一を目的とし、技師間差の検証を行ったため報告する。

【方法】神経伝導検査に1年以上従事している要員7名を対象とし、同一被検者の左正中神経の運動神経伝導検査を行い、下記の評価ポイントに基づき技師間差の検証を行った。評価ポイント：①潜時、波高値の計測(マーカーの位置は正確か)②神経の走行の捉え方(低出力で神経の走行を探ることができているか)③刺激強度の上げ方(単発の刺激で出力を徐々に上げていき最大上刺激に到達させているか)である。なお、電極位置はBelly-Tendon法に従い、使用機材は日本光電社製MEB-2300を用いた。

【結果】導出波形の波高値は遠位で中央値19.99mV(12.19mV~19.08mV)、近位で中央値

15.75mV(11.53mV~18.4mV)であった。最大上刺激時の出力は遠位で中央値11.6mA(7.0mA~30mA)、近位で中央値17.2mA(10.2mA~30mA)であった。潜時、波高値の計測は全員正しく行われていた。

【考察】波高値、刺激強度ともに要員間でばらつきがあったが、評価ポイントの②が一部要員において不十分であった。関連要員が全員出席するミーティングの際に結果を供覧し、特に出力が高かった要員3名については同日中に再検を実施し改善を認めた。具体的な手技を標準作業手順書に加筆し改訂、周知を実施した。また、次年度以降は内部精度管理(技師間差)の年間計画に神経伝導検査を加え、定期的にシミュレーションを実施することで継続していくこととした。

今回は正中神経だけの検証であったが、他の神経でも実施していく必要があると考えている。

【結語】健常者でのシミュレーションを行うことで、神経伝導検査の検査手技の技師間差低減に繋がった。

連絡先：0834-28-4411(内線：4111)